



沼津観光汽船株式会社 沼津観光汽船株式会社 沼津観光汽船株式会社

落款「沼津住人古桜侘」

佐々木古桜の描いた観光案内図『富士国立公園遊覧地帯観光案内』沼津観光汽船株式会社発行

沼津市内に在住した日本画家、佐々木古桜の描いた鳥観図の観光案内図を紹介します。

佐々木古桜、本名寿太郎は、明治25年(1892)京都に生まれ、京都で画家を目指して修業し、その後上京、浜松を経て、大正9年(1920)沼津に移り住みました。

大正13年(1924)河鍋晩齋の遺児と伝えられる宇田柳蔵(雨柳)の次女はると結婚し、戦時中には千本の緑町松下七反田に住み、昭和20年(1945)7月の沼津空襲で焼け出されてしまいました。

この頃の生活の様子は、後に当館に寄贈された『戦中絵日記』(原題は画便り・画日記)に記されており、豆画帳に繊細な絵と細かい筆遣いの文が刻まれています。三島大社には大きな武者絵を奉納しています。

昭和51年(1976)市内庄栄町で、83歳の生涯を閉じました。

昭和10年(1935)に御成橋の南、魚町の閉店した宮坂呉服店の建物を社屋として利用して設立された沼津観光汽船株式会社は「沼津丸」という大型の観光汽船を運航する会社で、4年後に解散した短命の会社でした。

狩野川右岸、御成橋南には白地に赤い三本筋の旗が描かれ、そこに沼津駅からの矢印が示されており、観光汽船の発着場であることがわかります。ここから赤い破線の航路が引かれていますが、東は戸田、西は清水までと保有する一隻の観光船で、すべての運航を行うのは難しく、かなり誇張が見られるようです。

案内図からは狩野川河口の黒鯛釣り^{くろだいつ}と千本浜の海水浴場が当時の重要な観光資源であったことがわかります。

内港は既に機能していたようですが、列車で訪れる観光客のために交通の便の良い魚町の船着場が利用されていたようです。東京から沼津までは電気機関車、それから西と御殿場線は蒸気機関車が走っていたことがわかります。沼津駅では機関車の交換が行われていました。

駿河湾の漁

川口 洋司さんの漁話

仕掛けを使ったハモ（アナゴ）漁 その1

川口さんが行って来た漁は、^{きんちやくあみ}巾着網（^{まきあみ}旋網）のように網組として集団で行う大規模の漁と、網組の休みなどの時に少人数で行うコショウバイと呼ばれた小規模の漁があります。コショウバイは、漁獲量や魚価等を考慮して、その時期に最も良い漁を選択して行います。今号も、コショウバイとして行って来た漁の一つであるハモ（アナゴ）漁です。

ハモと言えば、関西方面で湯引きなどにして食される高級食材としてのハモが知られていますが、^{ししはま}獅子浜のある^{しずうら}静浦地区では、ハモと言えば江戸前^{ずし}鮎の代表的な食材として知られているアナゴのことを指します。

川口さんの幼少期の頃は、ハモ漁と言えば延縄（写真1）による漁でした。中学生の頃になると延縄よりも効率の良い仕掛けを使用したハモ漁が行われるようになっていきます。仕掛けによるハモ漁は、我入道^{がにゅうどう}がすでに行っており、静浦地区の漁師も我入道の漁師からそれを見聞きして取り入れていきました。我入道という地域は、コショウバイが盛んなところで、新しい漁法を積極的に取り入れる漁業の先進地域でした。

このハモ漁で使われる仕掛けは、筒の口に漏斗状の返しをはめ込んだ仕掛けになります。筒の口が漏斗状になっており、入口が細くなっているため、一旦中に入ってしまった魚は出られなくなってしまいます。我入道ではこのような仕掛けをモジリと呼んでいましたが、獅子浜ではこのような仕掛けのことをその形状や素材で呼ぶことが一般的で、こうした仕掛けが使われ始めた当初の金網を筒形に丸めた仕掛けはカゴと呼び（写真2）、次に登場した水道などで使われる塩化ビニール製の灰色のパイプに穴をあけた仕掛けはツツやツツポ、またはパイプと呼んでいました（写真3）。また、仕掛けの口の所につく漏斗状の返しは我入道ではコシタと呼んでいますが、獅子浜ではこの部分だけをモジリと呼んでいます。

こうした仕掛けは、金網や塩化ビニールのパイプを購入して自作するもので、漏斗状の返しも、竹ひごを組み合わせて自分で作製していました。晩年になると筒も漏斗状の返しも工場生産された合成樹脂製の市販品の仕掛けが我入道で使われるようになり、獅子浜でもその評判を聞いて市販品の仕掛けを使うようになっていきました。金網製の仕掛けや塩化ビニール製の仕掛けは大型のため、船に積載できる本数に限界があり、扱いにくい点が欠点でしたが、市販品の仕掛けは細身であるために扱いやすく、また、多くの本数を積載することができました。

ハモは一年中捕ることができる魚です。川口さんの本業である網組の漁が休みとなるツキヤスミ（満月を中心に前後1週間程度）や網組としての漁が少なくなる冬季にハモ漁を行っていました。ハモは夜行性の魚で、ハモが活動する夜に漁を行います。ハモは海底に生息する魚ですが、岩場になっているところにはおらず、ヌク（泥地）のところに生息しています。ただ、ヌクの場所だとヌタボー（ヌタウナギ）が多く入ってしまいます。我入道では韓国へ輸出するためにヌタボーが捕られた時期もありましたが、基本的には売り物にはなりません。また、ヌタボーから出るぬるぬるとした体液が仕掛けの中にまわりついてしまい、その洗浄がたいへんなため、ヌタボーの掛かる場所は避けなければなりません。

…次号へ続く

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ 沼津市獅子浜在住）



写真1：ハモ用の延縄とその釣針

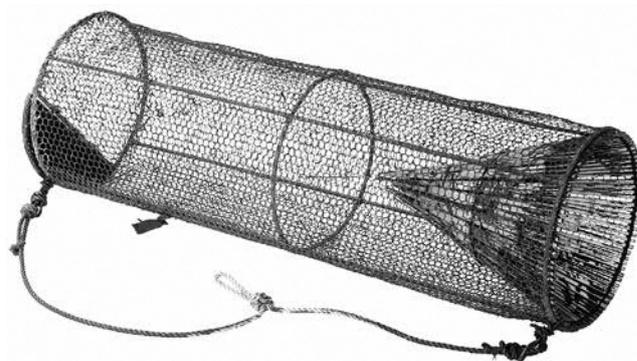


写真2：カゴと呼ばれたハモ漁の仕掛け

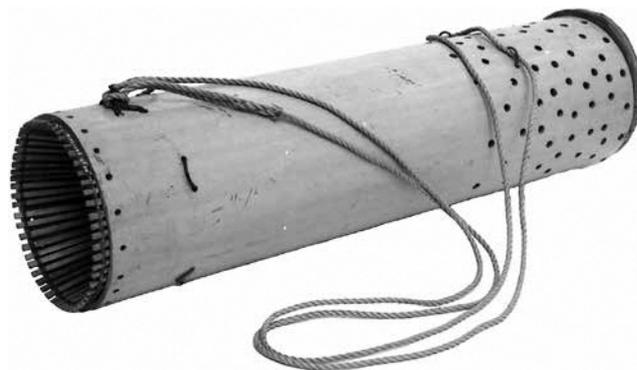


写真3：ツツやツツポなどと呼ばれたハモ漁の仕掛け

資料は全て沼津市歴史民俗資料館所蔵

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

■香貫・我入道編 その7 沖積低地の地形と洪水

前回下香貫善太夫（善太夫新田）、現在の塩場地区の「生活の舞台」を、地形や災害、集落の成立過程等で追った。善太夫西原付近の表層地質は砂質シルトで、旧集落が自然堤防の微高地に立地し、狩野川の洪水被害に遭う地形環境故に、治水面で堅固な堤防が西側と南側に構築されている。字塩場は江戸期の4戸から明治22年（1889）に6戸・47人、大正5年（1916）に15戸・100人と漸増する。大正期には集落南部に金毘羅神社が鎮座する。開発者の川端家はその後「川」の姓を名乗るが、続く改名の中で、河川の端に古くから拘った。

●「水除土手」（「障子川土手」） 文政11年（1828）作成の『御普請所 狩野川通絵図』に記載されたこの土堤は、字牛臥に至る総延長600間の規模を誇るランドマーク（陸標）で、その多くが上香貫・下香貫の村境に当たる。また『駿州駿河之郡上香貫村絵図』の元禄5年（1692）9月作成の原図でも、下香貫田地境としてこの古い土手が描かれている。狩野川から少し離れて位置するように、狩野川の洪水に対しては「控え堤」の機能を持ち、香貫用水の一部を併設している。明治20年の地形図や各種沼津市全図などに表示され、現在に至っても「八間道路」の国道414号から分かれ、下障子から塩場へ向かう道路として機能している。

この古土手の南寄りには下香貫の上障子川・下障子川（現字上障子・字下障子）で字障子川から明治期に上・下へ分離している。上香貫には字中障子があり、香貫用水の水路の分配、堰等に関係するものか。初期の山裾を巡る内膳堀に対し、上香貫の水路に接続して「上堀」と呼び、下香貫の人々の築いた新堀を「下堀」と呼んだ。その結果、上香貫に字中障子の地名が誕生したか。

「障子」は清水の意だが、位置関係からは不自然で、象頭山と関係するか。古く「掃除ヶ峰」（相持山とも）は象山の頭部の徳倉山に当たる。吉田神社はこの丘に元はあったが、後に楊原神社境内に移っている。その点よりソージからショージに訛ったと思われる。

長さ500間余の「障子川土手」は「水除土堤」に当たり、用水路が「障子川」で上香貫元組の本郷は障子（水源）に中を冠して中障子としたか。下障子川（現下障子）から堤土手は塩場の南側に向かう。

排水河川の江川は善太夫新田字三貫地から北流し、北側の上香貫字三貫地から長さ3町の悪水路が合流する。なお、昭和50年代初頭、字西村の南西寄りを掘削中に「流木群」が発見された。後背湿地の洪水堆積物で、供給地は狩野川側である。古堤築造以前の洪水で沈積したもので、川の寄せ場・静水域に直径30cm以上の流木が数10本残っていた。位置的には砂礫堆前面の

低い沖積段丘との境界部で、流木群の攪乱状態は狩野川台風下での永代橋際に似ており、1mから3m程まで泥水混じりの青灰色の還元層中で空隙が多かった。

●「氾濫原の地形と洪水」 氾濫原には沖積段丘化が始まってからの河川堆積物が広がり、沖積段丘を浅く下刻する低地部分を埋積した砂礫層や砂・シルト・粘土層からなる。上香貫の黒瀬町から文化センター際に比高差2m前後の崖があり、東側の沖積段丘は砂礫堆で、洪水の際も浸水が少ない高まりである。土地利用は旧字の下畑・御所海道が畑地、垣内も乏水地の開墾であり、南西側の字江間田は水田であった。玉江町付近は元「江間田」の地籍で、軟弱地盤の後背湿地で地下水面が浅く、田地に溝（江間）を掘って排水を良くした。

上・下の香貫村境で、狩野川の氾濫に対する古い「控え堤」が上障子に残る。堤の前面には西島と同様な自然堤防の微高地の模島があり、東・西に弓形の旧河道が取り囲む。東側の四日町沼津往還の旧道寄りには字江間田の旧河道で、西側の字溝成・三貫地にも旧河道が確認できる。この付近は海水準が低く、後背湿地でかつ排水不良地のため、江戸後期から悪水払いの溝が掘削され、今では江川の排水路が整備されている。

北側の字「夜光」は田地の水温が低く、冷たい「冷っこい」ことから付いた地名で知られる。また北側の吉田町で真しやかに語られる話として、地下に逝る水音が聞こえるのは、狩野川がこの付近を流れていたからだと言う。地下には勿論、川は流れていないが、確かに地下水面が浅く、旧河道でもあったのは事実である。

また「二瀬川」の説話として、狩野川が分流した地と解釈されているが、単に淡島神社で香貫用水の堰の分配地点だからである。「西島」は元狩野川の西側にあったからとの地名説話や、「模島」で二瀬に分かれていたという新説も登場する。「川瀬町」も以前は狩野川の中州（川瀬）だったからという中州説もあるが、これもまた短絡的で事実とは異なる。字二瀬川の西側は古堤と灌漑用水路の障子川が並行するが、崖下



2万分の1地形図 明治20年 ①障子川土手 ②中堤

の前面、旧河道の凹地部分は開発が遅れたために数多くの飛び地が存在した。槇島付近を狩野川が自由蛇行で流下した時期は中世に遡り、それも本格的な堤防構築以前の「無堤防の時代」である。

一方洪水氾濫後には、元の流れて復旧したことが「控え堤」の存在から分かる。大正期の『駿東郡楊原村全図』では字市場へのほぼ直路の北側に堤を兼ねた古道が位置し、曲がりながらも用・排水の木目細かな様子を描いている。明治20年の地形図でも北側の堤防の字

黒瀬下から菜園場で、黒瀬橋寄りの長さ232間の古土手が松や畑地のある土堤に対し、現在の三園橋付近の狭窄部には約310間の新堤防が描かれている。

やがて元の沼津城の川郭、志多町で狩野川は方向を転じて南流するが、対岸の市場八幡の西側には文政11年絵図で小さな48間の水除土堤が、今の香貫公園を囲む形で存在した。今も香貫用水末端部の排水不良地だが、文政11年当時「控え堤」として機能し、すでに局部的な水害を排除していた工夫には感心する。

沼津の歴史点描1 牛臥三島館を訪れた人々

②東郷平八郎

大正3年(1914)、裕仁皇太子が学習院初等科を卒業し、東宮御所内に東宮御学問所が設置され、同時に沼津御用邸東付属邸も皇太子滞在中は東宮御学問所となった。同学問所は学習院長の乃木希典が創設を発案したといわれるが、彼の殉死により、66歳の高齢であった東郷平八郎が総裁を務めることとなった。

裕仁皇太子は大正4年から9年まで、冬季は避寒静養のため西付属邸に長期滞在しており、この間は東付属邸の東宮御学問所で学んでいたと考えられ、総裁である東郷も来沼し、三島館に滞在したと見られる。

三島館滞在中のエピソードがある。館の風呂番であった落合倉吉は、着替えた禪を東郷から処分するように渡されたが、箱を造らせてそのまま大切に保管し、後に一人で訪れた東宮御学問所幹事の小笠原長生に見せ、証明のための箱書きを頼んだ。小笠原は苦心して狂歌を作り書き与えた。満足できない倉吉は次に学問

所御用掛の杉浦重剛に泣付き、漢詩を書いてもらった。この話が広まったため、禪を見たいという人が増え、そのたびに新たな外函を新調し、箱書きを依頼したため、しまいには外函が長持ち程の大きさになったというまことしやかな話も伝えられている。

箱書きをした人は徳川家達、宇垣一成、藤山雷太、徳富蘇峰、松平直亮、野田大塊(卯太郎)、水野練太郎などの名士100余名に及んだという。この人たちも三島館を訪れたことがあるということになる。

この話には、後日談があり、倉吉は三島館閉館後の昭和9年(1934)に上京、京橋区入舟町に寄宿していたが、5月29日東郷の容体悪化を知り、明治神宮で下座して、涙ながらに平癒を祈ったことが新聞記事となっている。(東郷は翌30日に没する。)

元是三島館の運動場だったと見られる牛臥の日緬寺境内には三島館にあったと見られる小笠原長生(「正二位勲一等子爵小笠原長生之書」)筆の「東郷元帥手植之楠」の石柱が残されているが、楠は見られない。

資料館からのお知らせ

金桜神社の絵馬が市指定文化財に

令和4年9月8日付けで市内の神社に奉納されている漁撈関係の絵馬22点が沼津市指定有形民俗文化財に



沼津市有形民俗文化財に指定された金桜神社奉納絵馬

指定されました。本館に寄託されている口野金桜神社へ明治40年に奉納された一雲齋国秀の描いたマグロ漁の絵馬もその中に含まれています。

沼津市歴史民俗資料館だより

2022.12.25発行 Vol.47 No.3 (通巻236号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp